

- 1 派遣期日 平成 29 年 8 月 21 日（月）
- 2 研修先 学校名 東京学芸大学附属世田谷小学校
所在地 東京都世田谷区深沢 4-10-1

3 研修内容

（1）視察校での研究への取り組み

研究テーマ：教科化時代に向けた道徳授業～主体的・対話的な学びと評価について～
主体的・対話的な学び

東京学芸大学附属世田谷小学校では、子ども自身が道徳性を養う中で自ら振り返って自己をみつめ成長を感じたり、さらには新たな課題や目標などを見つけたりする学習の工夫をしている。「対話」とは、聞いた話を考え、自分の考えも話し、そして話したことを振り返るという一連の流れから生まれるものと考えている。道徳科では、他者との対話も自己との対話もどちらも必要であるが、評価の在り方を考えると自己内対話をより大事にしたいものとしている。

道徳科における評価の在り方について

道徳性は、個人内の成長の過程を残す手立てと、教師から見た子どもの成長を一方的に評価するのではなく、子どもの思いを共感的に理解した上で評価の記載をすることを課題としている。ワークシートに書かれた思いや意図を分析するが、それが子どもの思考と一致しているのかを確かめる工夫をしていかなければならない。道徳性を養うための 4 点を中心に評価していることを考えている。

（2）授業公開 「すがすがしい心を感じて」（D－感動，畏敬の念）

① ねらいを達成するための指導法の工夫

・教材提示の仕方

「感動，畏敬の念」は、物語の中に語られている美しいものや清らかなものに素直に感動するような体験が大切である。そのため、教材提示に工夫が見られた。教材への感動をより高めるために、映画館のような環境を作り、場面絵を映し出し BGM をかけながら読んでいた。物語の最終場面である七つの星は、教室天井に映し出していた。今回の教材「七つの星」は、子どもの実生活とはかけ離れた童話である。ねらいとする価値へのより一層の深まりのために、子ども自身が教材との距離を縮める手立てであった。

・書く活動～教材と向き合う時間を十分に設定～

一人一人が、じっくりと教材の良さを感じ、それを一人一人が自分の言葉で表現できるような手立てとして、教材を読んだ後に感じたことをキーワードや文、絵等で付箋に書かせていた。

・話し合い～一人一人の感じ方があることの共通理解～

一人一人の感じ方や考え方があるということを実感する場として、友だちと話す場を意図的に設けていた。

・発問など教師から発する言葉の吟味

自分が感じたことを表出できたことのよさを自覚させる声かけをしていた。

「女の子（主人公）の優しさに気づけた A さん、すてきですね。」

実際の評価の視点

1 時間の中での評価の視点を明確にしていた。

【書く】

・導入と展開の後における思考の変容（導入時：ホワイトボードに箇条書き，展開後：ワークシート）や子どもがどう感じどう考えたのか学びの広がりや深まりを子ども自身でも振り返られるよう，導入と展開の後で同じような発問をもとに考えさせていた。ワークシートは，一人一人の思いが表出でき，また記録として残るため効果的だった。

【行動・表現】

- ・主に発言と傾聴に着目し以下のように分類して考える。

i) 発問に対して自分の考えを伝える。(発問)

ii) 教師や友だちの話をよく聞いている。

- ・うなずきやあいづちなどの反応する姿(判断しづらい)

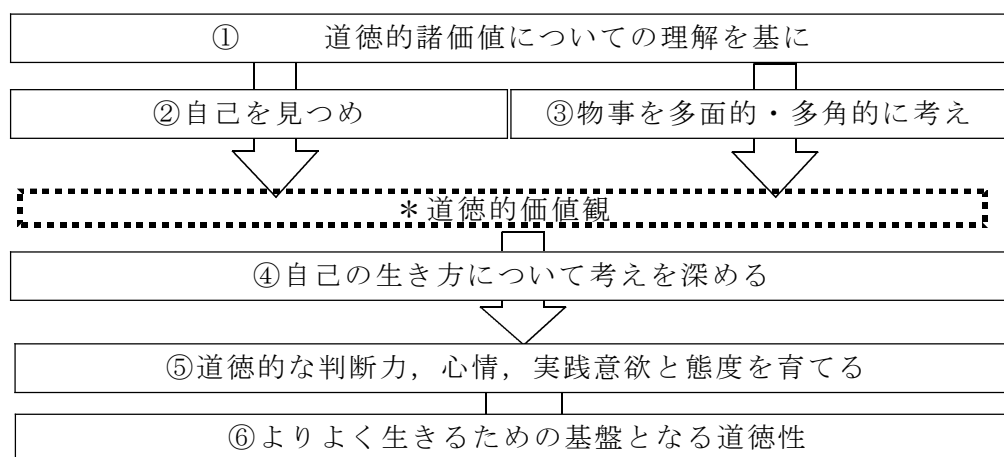
- ・友だちの考えと同じ・違う・似ているなどの考えを述べた上で、自己の考えを述べている。
(発言・傾聴)

- ・友だちの考えを踏まえて、考えを述べている。(深い発言・傾聴)

(3) 講話「道徳科の授業でどのように子どもの成長を促していくか」

東京学芸大学教育学部 教育心理学講座 准教授 松尾直博先生

- ・道徳科の目標から、道徳の授業のプロセスを整理



- ・読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習において、自分の心から他者の心を推測（「他者もこう感じ、考えるだろう」）させたり、他者の心から自分の心を内省（「自分はどうだろうか」）させたりする。一旦、自分から離れた方が自由な判断や心情が想像・創造しやすい。結果的に自己を見つめることができる。
- ・問題解決的な学習では、具体的な解決策と道徳的価値を適切に往還する授業を展開することにより、単なるハウツーを考える授業になることを防ぐ。

4 感想

○公開授業では、内容項目 D-21「感動・畏敬の念」をねらいとしていた。2 学年では、児童の生活の中に存在している身近な自然の美しさや心地よい音楽、芸術作品などに触れて気持ち良さを感じたり、物語などに語られている美しいものや清らかなものに素直に感動するような体験を通してすがすがしい心をもてるようにすることが大切である。このねらいに迫るため、資料「七つの星」の場面ごとに子どもたちに登場人物の気持ちを考えさせ、発表させるだけでなく、黒板いっぱい物語の場面の絵を貼ったり、天井に星を映したりなど、子どもたちを資料の世界に浸らせる工夫が随所に見られたのが良かった。

○授業の中で書く活動が多く設定されていた。発言できなかった子も、それぞれ自分の心の中を整理し、思いを表現することができていた。指導者も授業後に目を通すことで、子どもたちの考えや思いを評価することができる。また、協議会の時には、各学年の道徳ファイルを見せてもらった。道徳の授業や特別活動、行事などで考えたことや感じたことを書いたワークシートや感想がファイリングされており、蓄積していくことで、道徳の学習の中だけでなく、学校の教育活動全体のなかでの児童の変容を見ることができていた。

○今回のねらいであった「畏敬の念」は、難しい内容に感じた。畏敬の念には、根本に生命尊重があり、親切や思いやりなどいろいろな価値につながっていった。子どもたちに道徳的価値の自覚を深めさせるための発問の重要性を改めて感じた。